

第5章 事業効果に関する分析手法の検討

第5章 事業効果に関する分析手法の検討

本事業には、エコツーリズムを推進するために必要となる支援施設の整備とソフト面の取り組みが含まれる。その事業効果は多岐多様にわたり、ソフト面の取り組みの成否によって大きく左右される。そのため、「自然公園事業の費用便益分析マニュアル」に基づく分析のみでは、本事業の効果を適切に評価することはできないものとする。

「地域資源の資質の保全」と「観光の活性化」については、本事業によって直接効果が現れるため、量的・質的な面から評価することが可能である。一方、地域への波及効果（地域活性化）については、間接的に効果が現れることから、量的に評価することは難しく、多面的な視点からの評価が必要である。

本検討では、このような状況を踏まえ、直接的効果と間接的効果に分け、分析手法の検討を行う。

5-1 直接的効果（観光の活性化・地域資源の資質の保全）の分析

本事業による「地域資源の資質の保全」及び「観光の活性化」における直接的効果の評価方法を以下に示す。

(1) 評価指標

「地域資源の資質の保全」については質的な視点、「観光の活性化」については、量的及び質的な視点から評価を行う。それぞれの評価指標を以下に示す。

《地域資源の資質の保全の指標》	
● 登山道や自然探勝路周辺の植生及び荒廃状況の変化	
● 登山道や自然探勝路周辺の管理状況（ヤブ化・老朽化）	
● 環境保全関連活動・エコツアーの実施回数	
● 景観の変化	
● 外来種の侵入状況の変化	
● 利用ルールの周知状況	

《観光活性化の指標》	
【量的な指標】	【質的な指標】
● エコツアー利用者数	● 利用者の満足度
● ガイド数	● リピーター数
● 施設利用者数	● エコツアープログラム数
● 宿泊者数	● エコツアー料金
● 観光入込客数	
● 観光収益	

(2) 評価手法(案)

モニタリング及びアンケート調査、統計資料によりデータを収集し、評価する。
調査実施方法を以下に示す。

1) モニタリング

i) モニタリングの対象

モニタリングの対象は、地域資源の資質の保全の指標に示した項目とする。

ii) モニタリングの実施方法

地域資源の質の保全に関するモニタリングは、現地調査及びヒアリングにより行う。
現地調査では調査票を作成し、調査結果を記入する。

調査データは、エコツーリズムセンターで一元管理する。

当面は、専門家のアドバイスを得つつ、ガイド事業者の研修または環境保全活動のモニタリングツアーとして実施する。

将来的には、モニタリング技術を習得したガイドによるエコツアープログラム、または環境保全活動のイベント等としての実施が考えられる。

2) アンケート調査

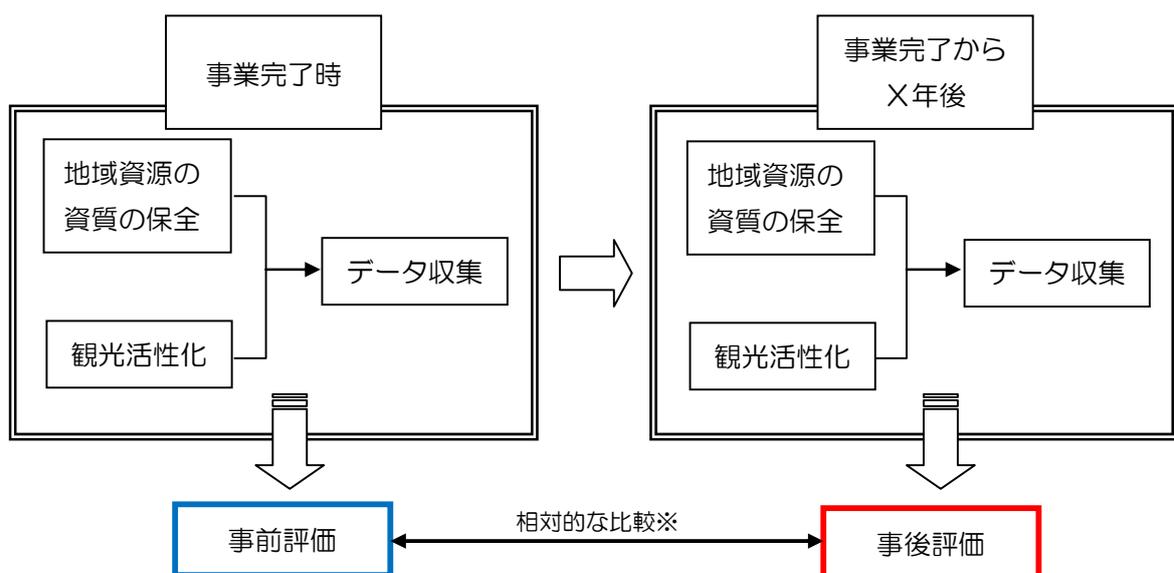
i) 調査の対象

エコツアー利用者、ガイド事業者、宿泊施設を対象に、アンケート調査を行う。

ii) 調査の実施方法

エコツアー利用者へのアンケートは、調査票をツアー実施後に配布し、記入してもらう。エコツアー利用者全員を対象とする。

直接的効果の評価フロー(案)



※事前評価を基準値(基準年)とし、事後評価との相対的な比較を実施する。

表 5-1-1 評価指標のデータ収集方法一覧

分野		評価指標	モニタリング	アンケート	統計資料
地域資源の 資質の保全	質	登山道や自然探勝路周辺の 植生及び荒廃状況の変化	●		
		登山道や自然探勝路周辺の 管理状況（ヤブ化・老朽化）	●		
		環境保全関連活動 ・エコツアーの実施回数		●	
		景観の変化	●		
		外来種の侵入状況の変化	●	●	
		利用者ルールの周知状況	●	●	
観光活性化	量	エコツアー利用者数		●	
		ガイド数		●	
		観光収益		●	●
		施設利用者数			●
		宿泊者数			●
		観光入込客数			●
	質	利用者の満足度		●	
		リピーター数		●	
		エコツアープログラム数		●	
		エコツアー料金		●	

5-2 間接的効果（地域活性化）の分析

エコツーリズムの展開による地域活性化への効果を分析するためには、何をもちて地域が活性化したとするか（地域活性化の定義）を明確にしておく必要がある。近年、地域活性化は経済面だけではなく、環境や文化などの側面にも着目して、多様な観点から分析する必要があるとされている。

本項では、地域活性化の定義を明確にしたうえで評価の指標を設定し、エコツーリズムの展開による地域活性化の効果を分析する手法について検討を行った。

(1) 地域活性化の定義

従来地域活性化の分析では、「人口動態」や「産業の発展」といった「量的な拡大」をもって『活性化している』とされてきた。一方、活力ある地域では、地域住民が地域活動に関わることが多いという共通性があるとの分析*があり、本事業による効果の分析においても、「量的な拡大」ということ以上に、多面的な視点から効果を分析することが必要である。

本事業の効果を分析するにあたっては、「量的な拡大」だけではなく、①地域住民が地域活動に多く関わっているかどうか、②住民が住みよい地域と認識しているかどうか、という視点を取り入れ、地域活性化を次のとおり定義する。

*参考文献：平成20年度地域活性化のための農業集落データ分析委託事業報告書

《地域活性化の定義》

- ①地域の住民や事業者の「地域活動への参加状況」に着目し、地域活動に多く関わっている地域を『活性化している』と捉える
- ②住民が住みよい地域と認識している「満足度」に着目し、満足度が高い地域を『活性化している』と捉える
- ③「人口動態」と「人口構成」に着目し、人口が増加または維持されており、近い将来においても定住人口の維持（または減少率の低下）が可能である地域を『活性化している』と捉える
- ④地域の「経済動向」に着目し、近年における地域の産業が着実に発展している場合を「活性化している」と捉える

(2) 評価の指標について

地域活性化の分析では、「人口動態」など代表性のある指標についての「量的な拡大」で判定されてきたが、本検討では多面的に評価するため、「経済的要素」、「社会的要素」、「文化的要素」、「空間的要素」の4つの視点から地域活性化を測ることとする。

各要素の指標を以下のとおりとする。

《エコツーリズムによる地域活性化の指標》

- ① 経済的要素
 - ・ エコツアーにおける地元産業への支払い額
 - ・ 産業部門別の収益の動向
- ② 社会的要素
 - ・ 流入人口の変化
 - ・ エコツーリズム推進協議会（仮称）等の開催回数
 - ・ 新聞やマスコミへの掲載状況の変化
- ③ 文化的要素
 - ・ 交流イベント等の開催回数と参加者数
 - ・ 地域活動、環境保全活動への参加回数
 - ・ 住民の満足度
- ④ 空間的要素
 - ・ 景観の向上（地域資源の資質の保全）
 - ・ 地域イメージの向上

(3) 評価手法（案）

上述した指標に基づいて地域活性化を分析し、評価する手順を図 5-2-1 に示す。分析のためのデータは、統計資料を利用するとともに、エコツアー利用者、地域の観光関連事業者、地域の民間企業及び住民等を対象としたアンケート調査を実施する。

アンケート調査をより有効なものとするため、本調査の前に小規模な事前調査を実施し、調査方法やアンケート調査票の問題点を検証し、本調査の実施方法を決定する。

評価は点数制で行う。指標ごとに点数をつけ、合計点が一定点以上になった場合に活性化したと判断する。より正確に評価するために、指標の重みづけを行い、重要な項目については得点が高くなるように、点数に一定倍率をかける。重みづけについては、事前調査において重要であると考えられる項目を選定していただき、それに基づいて設定する。

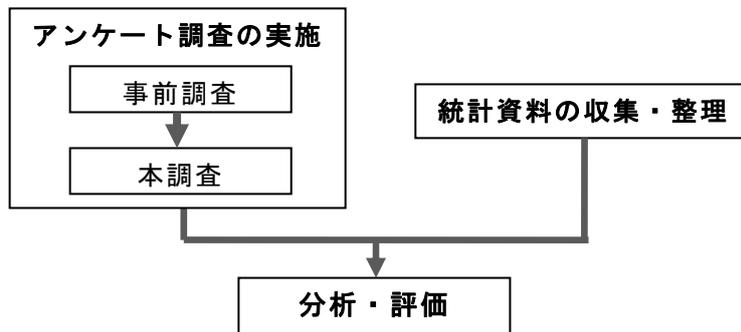


図 5-2-1 評価の手順

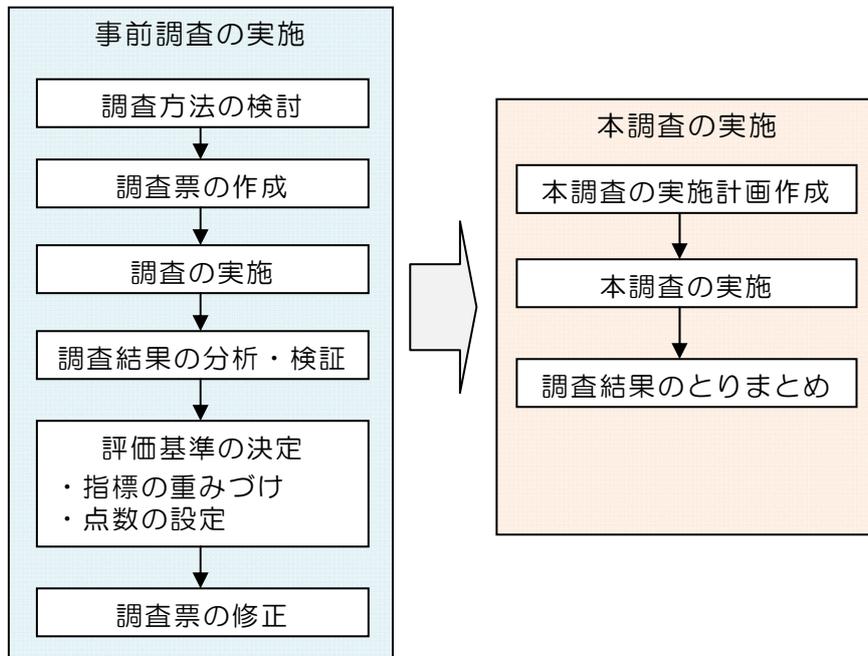


図 5-2-2 アンケート調査の流れ

5-3 フォローアップ計画の策定

(1) フォローアップの流れ

フォローアップは、実施した事業や取組みを検証・評価し、問題点があれば改善していくことを基本とする。エコツーリズムにおいても、観光振興を継続していくためには、地域関係者が自らフォローアップを行い、問題点を改善しながらスパイラルアップしていくことが不可欠である。これを繰り返すことによって、継続的な改善が可能となる。

フォローアップの流れを図 5-3-1 に示す。フォローアップにおける評価としては、前述した事業効果の評価とともに、地域資源の状況のモニタリングが必要である。モニタリングでは、地域資源の資質が保全されているか、ルールに則った利用が行われているか等をチェックし、問題が生じていれば問題箇所を抽出し、必要な対策を施し改善する。

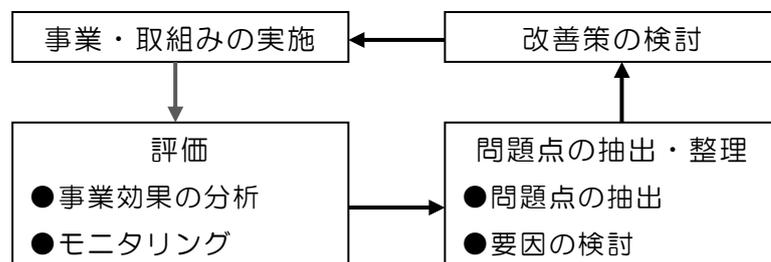


図 5-3-1 フォローアップの流れ

(2) フォローアップ体制

エコツーリズムによる観光の活性化を持続させるためには、地域関係者が自らフォローアップを行うことが望ましいため、エコツーリズム推進協議会（仮称）が主体となって実施できるように支援していく必要がある。

事業や取組みの評価、問題点、改善策等については、関係者が情報と認識を共有して取組みに生かしていくことが重要であり、エコツーリズム推進協議会（仮称）の会合等を適宜開催し進めていく。

フォローアップにおいて必要となると考えられる支援を以下に整理する。

○モニタリングへの支援

モニタリングについては、地域関係者が主体となって行えるように、モニタリングマニュアルを作成する、調査を指導する専門家を派遣するなどの支援が必要である。

○改善策の検討への支援

モニタリングで問題が確認された箇所の改善において、専門的な技術が必要な場合に、専門家を派遣するなどの支援が必要である。

第6章 意見交換会及び懇談会の開催

第6章 意見交換会及び懇談会の開催

上川地区及び東川地区におけるエコツーリズム推進の可能性について関係者間で意見交換を行うことを目的とし、意見交換会を実施した。以下に概要を示す。

6-1 第1回 大雪山国立公園におけるエコツーリズム推進の可能性に関する意見交換会

【上川地区】

(1) 実施概要

開催日時：平成24年1月25日（水）13:30～16:00

開催場所：上川町役場 大会議室

出席者数：20名

(2) 開催状況

当日の次第及び議事概要を以下に示す。なお、議事内容は資料編に示す。

〈次第〉

1. 開会

2. 開会の挨拶

3. 議題

(1) 大雪山国立公園上川地区における利用動向・資源等に係る各種調査結果の報告

(2) 調査結果に関する意見交換

(3) その他

4. 閉会

〈議事概要〉

- ・ 現在、利用できない小函を、再びお客に見てもらえるように体制を整えるかが課題。
- ・ モニターツアー等を実施して、まだまだ取り入れられる資源はあると認識している。
- ・ 自然観察に参加したいという要望をよく頂き、ツアーの需要はある。
- ・ 上川町民の方が層雲峡のことについてよく知らないという現状がある。
- ・ 層雲峡～三国峠を歩いていくルートをうまく活用したい。
- ・ 現在、各団体で連携や情報共有はしていない。
- ・ 層雲峡は大雪山の玄関口であるのに山のイメージがなかった。宿泊地としての位置づけが強かった。これまで団体ツアー客を相手にしてきたが、これからそうはいかない。今後はイメージ作りが大切だし、商品として形にすることも大切。



写真 6-1-1 開催時の様子(1)



写真 6-1-2 開催時の様子(2)

【東川地区】

(1) 実施概要

開催日時：平成24年1月26日（木）13:30～16:00

開催場所：道草館 2階会議室

出席者数：22名

(2) 開催状況

当日の次第及び議事概要を以下に示す。なお、議事内容は資料編に示す。

〈次第〉

1. 開会
2. 開会の挨拶
3. 議題

(1) 東川地区における利用動向・資源等に係る各種調査結果の報告

(2) 調査結果に関する意見交換

(3) その他

4. 閉会

〈議事概要〉

- ・ 登山道の荒廃に対する利用者の意識も、変化しつつあるのではないかと感じる。
- ・ 地元のガイドが集まって話し合い、そこからローカルルールを作っていけばよい。
- ・ ガイド協会のようなものを作って、情報の集約ができればよい。それに地元施設等が関わっていくことによって、本来のエコツーリズムの姿が見えてくるのでは。
- ・ 大雪山全体を考えた場合も、ガイドを育てていくことが重要。登山道の荒廃を食い止めるためにも、ガイドにできるだけ積極的に関わってほしい。
- ・ 地元の方々とうまく組織づくりをしていかないと、すべて他人事になってしまう恐れがある。
- ・ 東川町は情報の発信が一元化されていないのがウィークポイント。情報の共有化も含めた組織作りが大事だと思う。
- ・ 情報提供に関して登山客と観光客にどうやって対応していくか考える必要がある。
- ・ 木道等についても整備して終わりではなく、移動や破損状況などをモニタリングしてデータ化していくことが必要。



写真 6-1-3 開催時の様子 (1)



写真 6-1-4 開催時の様子 (2)

6-2 第2回 大雪山国立公園における地域資源保全と地域活性化（エコツーリズム推進の可能性）に関する意見交換会（東川地区）

(1) 実施概要

開催日時：平成24年3月13日（火）10:00～12:00

開催場所：東川町農村文化改善センター 1階研修室

出席者数：17名

(2) 開催状況

当日の次第及び議事概要を以下に示す。なお、議事内容は資料編に示す。

〈次第〉

1. 開会
2. 開会の挨拶
3. 議題
 - (1) 東川版エコツーリズムに関する意見交換
 - (2) 支援施設に関する意見交換
 - (3) 推進体制に関する意見交換
 - (4) その他
4. 閉会

〈議事概要〉

〈東川版エコツーリズムのあり方について〉

- ・エコツーリズムは手段であると思う。目的は地域の課題を解決するためだと思う。
- ・山のことだけではなく、町の文化にも目を向けて話ができれば面白いと思う。
- ・現在、実施しているガイディングの中で、登山道や散策路が人の手によって保全されているということは伝えるようにしている。

〈支援施設について〉

- ・今のビジターセンターではカバーできていない情報公開をしっかりと行うことで、旭岳ロープウェイ駅や登山道に近い場所に拠点施設をつくる理由付けが出来ると思う。
- ・ガイドの立場からすると、ハードこそ資源である。ハードが色々な事業を行う中で重要な資源である。道、トイレ、建物等のハードがあることは、エコツーリズムを進める上で重要であると思う。
- ・地図や小冊子の販売等を行ってほしい。



写真 6-2-1 開催時の様子

6-3 第3回 大雪山国立公園における地域資源保全と地域活性化エコツーリズム推進に関する
東川・上川地区合同懇談会

(1) 実施概要

開催日時：平成24年3月13日（火）13:30～16:00

開催場所：東川町農村文化改善センター 1階研修室

出席者数：21名

(2) 開催状況

当日の次第及び開催状況を以下に示す。なお、議事内容は資料編に示す。

〈次第〉

1. 開会
2. 開会の挨拶
3. 寺崎竜雄氏講演
○エコツーリズム先進地の事例紹介
4. 上川地区取り組み状況について
5. 東川地区取り組み状況について
6. 意見交換
7. その他
8. 閉会

〈寺崎氏講演議事概要〉

●大雪山、層雲峡、旭岳温泉に対して感じたこと

〈大雪山〉

- ・山として壮大なイメージがあり、ずっと訪れたかった憧れの地だったが、どこから登り始めるか等、具体的なイメージが希薄。

〈層雲峡〉

- ・訪れる前は大雪山のイメージは全くなく、昔ながらの団体温泉街のイメージ。
- ・旅行会社への依存が高そう。いまどきの個人客に対応しきれぬか懸念される。

〈旭岳温泉〉

- ・訪れる前は存在を知らなかった。

〈全体として〉

- ・現状では、大雪山という「第1級の資源」「なまえ」が十分に生かされていないと感じる。
- ・周辺での過ごし方、楽しみ方がよくわからない。
- ・層雲峡側と旭岳側では、状況は異なるが何らかの提携があると面白くなりそう。

●エコツーリズムの先進事例

【屋久島】

- ・屋久島のガイド業は1993年頃より10名くらいの人数から始まった。現在では200名近く。

- ・ひとつの観光地に留まりじっくり味わう旅のスタイルの変化に屋久島はうまく対応できていた。その結果、経済効果の増大、来訪者数の増加、滞留時間の増大、新たな地域産業（ガイド業）の確立。
- ・その一方でツアー品質の低下、自然資源の損壊、ふるさと性(そこで暮らす安心感)の阻害、ガイドと地元民の摩擦等の課題も生じている。

【軽井沢】

- ・誰でも参加可能な早朝からのツアーを開催している。2時間¥1500。
- ・地元の特産品を扱う店とも協力し、ツアー内容に組み込んでいる。
- ・自然環境はありふれているが、演出を工夫している。これらが実現可能なのは、地域に住み、地元を良く知っているためである。
- ・これまでは有力な資源の有無で勝負が決まったが、現在は、資源を発掘し、どのように魅力づけをするか、地域に暮らす住民の工夫と努力次第で決まる。

【滋賀県高島市、岩手県二戸市】

- ・暮らしの中ではぐくまれてきた生活文化を素材として活用することで、観光地のような資源がなくても売り出すことは可能。
- ・地域の中の文化を含めた資源発掘は、まさにお宝さがしである。
- ・文化を資源とすることは、地域活性化や地域文化の継承にもつながる。

●他の地域での取り組み

【小笠原】

- ・主な楽しみ方はホエールウォッチングである。1989年に自主ルール策定。小笠原ホエールウォッチング協会が中心となって管理している。
- ・陸域では、近年人為的な要因により外来種侵入、ルートの荒廃等の問題が生じている。これを受け、南島では入島者数と行動内容を制限。また、定期的なモニタリング、自然再生、関係者間で定期的な情報交換がされている。その結果、荒廃部は回復し始めている。
- ・海域のエコツアー関連の動きは1990年頃からみられているが、陸域のガイドは2005年に協議会が設立されたばかり。陸域ガイドツアーの増大、陸域利用の無秩序、未熟なガイドによる観光客の満足度低下等の懸念を受けたもの。今までにガイドの安全管理に関する勉強会等を行っている。2012年には陸域ガイド制度がスタートしている。
- ・ガイド各社のツアー内容等の広報をA4紙1枚にまとめ、観光協会が一覧掲示している。利用者が比較検討できる。
- ・現在では、2004年に発足されたエコツーリズム推進協議会が中心となり、エコツアー、ガイド情報を取りまとめている。
- ・小笠原に携わって感じるのは、地元の人には自分の大好きな小笠原を存分に楽しんで欲しいという思いが強いということ。関係者それぞれの思いが強いゆえに意見がぶつかることもあるが、その思いを汲んで、より良い小笠原のエコツーリズムのあり方を模索していきたいと思っている。

【白神山地】

- ・世界自然遺産として、自然保護の徹底と、遺産地域周辺を利用した観光の両立を目指す。その手段としてエコツーリズムを推進することとした。
- ・事業が1部地区のみに限定されていたため、白神山地として地域を売っていく体制ができていなかった。
- ・2009-2010年度、エコツーリズムを通じた環白神地域の振興と環白神地域の自然・文化資源の保全と適正利用の推進を目的とし、「環白神エコツーリズム推進協議会」が設立。協議会では、研修会、ワークショップ、お宝調査、モニターツアー等を開催する。
- ・当面の事業は、情報の一元化、「環白神」としての情報発信・プロモーション活動、旅行商品の開発に取り組むこととしている。
- ・一昨年発足したが、財源不足のため昨年の活動はなかった。
- ・今後の方向性としては、公共事業の力も借りながら、推進計画の策定、エコツアープログラムの開発、環白神地域ルール策定、地域コーディネーターやガイドの育成を行う予定。

●エコツーリズムの3つのタイプ

エコツーリズムは3つのタイプに分類される。

類型1：豊かな自然の中での取り組み(屋久島、知床等)

類型2：多くの来訪者が訪れる観光地での取り組み(軽井沢等)

類型3：里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取り組み(その他)

【類型1の特徴】

- ・資源力が高く、ガイドツアーが成立しやすい。
- ・知名度で観光客を誘致しやすい。
- ・適切な利用のためのルール作りが急務。
- ・資源利用を巡りトラブルが生じることがある。 等

【類型2の特徴】

- ・すでに多くの観光客が訪れているので「ガイドツアー」を事業化しやすい。
- ・ガイドツアーの成立には、ガイド力(素材を味付ける力)が重要。
- ・ガイドツアーが成熟しているところは類型1と同様の課題がある。 等

【類型3の特徴】

- ・地域の素晴らしさを再発見、誇りにつながる。
- ・知名度や資源性で観光客を誘客することは困難。
- ・ガイドは地域住民。新たなガイドの参入は困難。
- ・ガイドツアーを事業として継続し、産業とするのは困難が多い。地域活力増大のための手段のひとつとして考えざるを得ない部分はある。

- ・2005-07年に行われた環境省のモデル事業では、50箇所以上の応募があったが、半数以上が類型3だった。地域の状況に応じたエコツーリズムの推進が求められる。
- ・重要なのは、自分たちの地域はどうあるべきであるかを考え、共有すること。そこに向けた道順を共有し、一歩ずつ進むことである。

●エコツーリズムの捉え方

- ・資源そのものの観光経済価値が、ガイドによって付加価値が高まる。資源はありふれた自然である場合や、価値の高い自然である場合もある。
- ・資源を味付けして提供することにより観光客の満足度が高まり、地域に対してお金を払う。
- ・払われたお金でガイド業が成立する、地域が潤う。その流れで、自然の保全と継承が行われていく。



写真 6-3-1 講演会の様子

〈意見交換会議事概要〉

- ・層雲峡では以前からモニターツアー等を実施し、多くの参加があり、ある程度の感触を得ている。これからは、それらの取り組みを商業ベースで事業化していきたいと考えているが、どのように進めていけばよいのか。
- ・着地型商品として地域でアイデアを出してモニターツアー等として売り出すが、「売る力がない」というところで行き詰っている例が多い。ポイントとはどうやってマーケットに結びつけることではないかと思う。
- ・工夫として、各社それぞれで売るのではなく、エリア全体として売り込む総合的な窓口を地域に作ろうとする動きがでてきている。一方でそれらを運営していく経費などの課題があり、うまくいっている例は少ないのが現状。
- ・多くの地域で、外からガイドがお客を連れて来ることを快く思っていないことが多いと感じる。地元の自然を守っていくために手入れなど行っている地域の人たちへの配慮が必要ではないかと感じる。

- ・ガイド事業者の数が余りにも増えすぎるのは問題だと思うが、数を地域で制限することは実際できない。
- ・短期的ではなく、長期的に地域の資源の質を保っていきたいと考えているが、制限という部分では難しいと感じている。実際にはどのようにしていけばよいのだろうかと考えてしまう。
- ・増えてしまったガイド事業者を減らす訳にはいかない。いずれそうなることが予想されたら、なるべく早いうちに話し合いをしながら、自分たちの地域の将来のビジョンを共有し、そのためにどうするかを皆で相談しながら少しずつ取組んでいくのがよいのではないか。
- ・東川であればガイド事業者が少ないうちに、最初の段階でその地域のルールなどを先に決めるのが良いのではないかと思う。
- ・どの程度の受入れが可能か、自然資源と観光の両面から許容量を把握しておくことは必要だと思う。
- ・東川町と上川町両地域でガイドの登録制のようなシステムを作ってはどうか。そこからまず一緒に取組んでいければ、一緒に保全活動などを進めることが可能となり、そういった取り組みが大雪の保護やすばらしさを伝えることにも繋がっていくと思う。